

兵庫県立いなみ野特別支援学校 支援部（TEL:079-492-6161） R8.11.24 発行 第７号

※本紙は、本校ブログにも掲載しています。→

支援だより「いなみ野」をご覧の皆様、こんにちは。朝晩の冷え込みが一段と厳しくなり、冬の訪れを感じる季節となりました。年の瀬が近づき、子どもたちも冬休みを心待ちにしながら、学期のまとめの活動に元気いっぱい取り組んでいます。今回のコラムでは、11月に実施した交流活動「ひょうごっ子“絆”プロジェクト」を主にご紹介します。

学校行事予定

※予定変更が生じた際は、本校ブログにてお知らせいたします。

◆12/3　小３校外学習　◆12/7　小１校外学習　◆12/7　高３・あおのオンライン交流
◆12/8　高等部生徒会立会演説会・投票　◆12/10　高等部販売学習（校内）
◆12/11　高等部販売学習（保護者）　◆12/22　給食終了　◆12/23　大掃除
◆12/24　終業式　◆12/25～1/7　冬季休業

コーディネーターコラム

「困った行動」には理由がある。



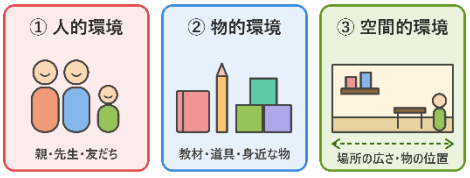
「どうして本を破るのだろう？」「どうして同じことを繰り返すのだろう？」「どうして活動に参加しないのだろう？」

コーディネーターをしていると、地域からも校内からも、様々な相談が寄せられます。「どうしたらいいですか？」と聞かれることが多いのですが、私がいつも大切にしているのは、「困った行動」をやめさせる方法を探すことではありません。**「困った行動」がなぜ起こるのかを、一緒に考える**ことです。

「ダメなことはダメ」と伝えることは大切です。けれども、大きな声で叱りつけたり、子どもの物を取り上げたりする対応は、子どもが慣れてくるとだんだん効かなくなり、さらに強い対応が必要になってしまいます。そして、いつか限界を迎えて、かえって対応が難しくなることがあります。

感情的になってしまう気持ちは、とてもよく分かります。私にも経験があります。それでも、**少しだけ立ち止まって、子どもの目線や表情、子どもを取り巻く環境に目を向けてみましょう**。環境は、次の３つに分けて考えることができます。

①人的環境…親、先生、友だちなど
②物的環境…教材、道具、身の回りの物など
③空間的環境…過ごす場所の広さ、物の置き場所など



叱ることで「困った行動」が減るなら、その対応は効果があったと言えるでしょう。しかし、特別支援教育を必要とする子どもたちの場合、一度伝えただけでは行動が変わらないことが少なくありません。

「なぜ」が分かれば、その原因に働きかけることで、「困った行動」は少しずつ減っていきます。また、叱られることが多い子は、褒められる機会が少なくなりがちです。だからこそ、「本を大事にしてえらいね」「今日は音楽の活動、がんばったね！」と、具体的に伝わる言葉で褒めることが大切です。望ましい行動が増えていけば、「困った行動」は自然と減っていきます。

ひょうごっ子“絆”プロジェクトと地域とのつながり

兵庫県教育委員会が推進する「ひょうごっ子“絆”プロジェクト」は、仲間との活動を通して豊かな心や自立心を育む取組です。本校でもこの趣旨のもと、学校内にとどまらず、地域の方々との交流を大切にしています。社会や地域へ「絆」を広げる体験を通して、子どもたちの自尊感情や、他者と関わる力を温かく育てていきます。

現場からの実践紹介

かかし作りを通して地域とつながろう（絆プロジェクト）

中学部では「ひょうごっ子“絆”プロジェクト」の取組として、JA 兵庫南の皆様をお招きし、「かかし作り」の交流授業を行いました。 子どもたちは、JA の方々に作り方を教わりながら、新聞紙を詰めて胴体や手足を作ったり、古着を着せたりと、それぞれの作業に一生懸命取り組みました。実演による分かりやすい説明のおかげで、見通しをもって活動することができました。 JA の方々と一緒に手を動かし、協力して立派なかかしが完成しました。最後は、かかしと JA の皆さんと一緒に記念撮影。みんな誇らしげな笑顔を見せてくれました。JA の皆さんとの温かい交流を通して、地域社会とのつながりや、役割をやり遂げる大きな達成感を味わうことができました。

今回制作したかかしは、にじいろふぁーみんで 12 月 24 日ごろまで飾られる予定です。機会がありましたら是非ご覧ください。









支援ミニコラム

「役割」が育てる自己肯定感

学校や家庭で「自分にもできることがある」「誰かの役に立っている」と感じられる経験は、子どもたちの自己肯定感を大きく育てます。

「電気を消す」「プリントを配る」といった小さな役割でも、まわりから「ありがとう」と感謝されることで、子どもたちは自分の存在価値を実感します。また、責任感や「次はこれをしよう」という見通しをもつ力にもつながっていきます。

大切なのは、その子の得意なことや無理なくできる範囲から任せることです。身近なところから、小さな「係」や「お手伝い」を経験させてみませんか。